

- Nisbet, Ada. *Dickens and Ellen Ternan*. Berkeley: U of California P, 1952.
- Oppenlander, Ella Ann. *Dickens' "All the Year Round": Descriptive Index and Contributor List*. New York: Whitston, 1984.
- Page, Norman. *A Dickens Companion*. London: Macmillan, 1984.
— —. *A Dickens Chronology*. London: Macmillan, 1988.
- Perugini, Kate. "Edwin Drood," and the Last Days of Charles Dickens' *Pall Mall Magazine* 1.32 (June 1906): 642–54.
- Robinson, Kenneth. *Wilkie Collins, A Biography*. New York: Macmillan, 1952.
- Schlicke, Paul. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983.
- Storey, Gladys. *Dickens and Daughter*. New York: Haskell, 1939. 1971.
- Tomalin, Claire. *The Invisible Woman, The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*. London: Penguin, 1991.
- Wagenknecht, Edward. "Dickens the Scandalmongers." *College English* 11.7 (Apr. 1950): 373–82.
- Wright, Thomas. *The Life of Charles Dickens*. London: Jenkins, 1935.
— —. *Thomas Wright of Olney*. London: Jenkins, 1936.
- <http://www.dickenslive.com/> No name of the editor nor e-mail address.

ディケンズと素人演劇活動

—演劇活動と創作の新領域—

Dickens and Amateur Theatricals:

Their Effects on his Novel Writing

西條 隆雄

Takao SAJO

1 素人演劇活動に使った脚本

ディケンズと演劇の関係は深い。幼い頃に打ち興じた紙芝居やパントマイムをはじめ、街灯で目にしたさまざまな芸当や余興、アストリー座の曲馬、マシューズのワンマンショー、あるいは『ボズのスケッチ集』に見られる小劇場での演劇風景、そしてまた自ら観劇した数え切れないほどの当時の芝居は、ディケンズ文学を形成する大きな基盤を成している。加えてディケンズは戯曲6点(うち2点は共同執筆)をも著している。

同時に、彼には俳優として、舞台監督として、また番組を編成し興行を成功させる座長として腕を振るった素人演劇活動のあることもよく知られている。ところで、この演劇活動については、脚本やスーリーをも含めて詳しく解説をした文献は少ない。実際に素人劇団の一員に加わり、回想録を残したカウデン・クラーク夫人(Mary Cowden Clarke, 1809–98)とか、その活動を目のあたりにして記録したR・H・ホーン(R. H. Horne, 1802–84)はいるが、いずれも部分的な記録に終わっている。ほぼその全貌を描いたのはW・デクスター(Walter Dexter, 1877–1944)であるが、これもディケンズの演技の巧みさ、采配ぶり、観客の反応は伝えるとして、創作と演劇活動の相互関係についてはさほど触れていない。

無謀ながら、ディケンズの素人演劇活動を追い、それと小説執筆がどのように関わっているかを調べてみたいと思いついたのは1980年代の半ばであった。何はさておき、ディケンズの用いた演劇脚本を手に入れるのが先決問題で、フォーセット(Fawcett)が作成した20数篇の演劇リスト(Fawcett 255–56)を片手

に探しはじめた。しかし戯曲集をいくらめくっても、探している脚本は何一つ出てこない。Inchbald ed., *The British Theatre* (25 vols., 1808), *The British Drama Illustrated* (12 vols, 1864), *London Stage* (4 vols., 1824–27) のページをめくってわずか2編を見つけ、*Planché's Extravaganzas* (5 vols., 1898) を購入した時、ここに1篇を見つけたにすぎない。

19世紀戯曲集には他に次のようなものがある。

Cumberland's Minor Theatre (1828–40)

Dicks' Standard Plays (1880s)

Duncombe's Edition of the British Theatre (c. 1850)

French's Acting Edition (1850–60)

Lacy's Acting Edition of Plays (1850–60)

Richardson's New Minor Drama (1828–31)

これらはどこにでもあるという訳ではない。たまたま訪れたスタンフォード大学やカリフォルニア大学にも所蔵はされていなかった。そこで、より正確に突き止めることができるよう、Allandyce Nicoll, *A History of Early Nineteenth-Century Drama 1800–1850* (Cambridge, 1930) および *The Player's Library: the Catalogue of the Library of the British Drama League* (British Drama League, 1950) を用いて脚本名とその収録戯曲集の特定を急いだ。

このとき、『ナショナル・ユニオン・カタログ』に *List of Dicks' Standard Plays and Free Acting Drama* (London: J. D. Dicks, n.d.) がカンザス大学の稀覯本のなかにあることがわかり、これをマイクロフィルムにとって送ってもらったところ、1,057点の戯曲リストを一望することができた。

時間はかかったが、自ら探し当てたり、在外研究に行っている方の手を煩わしたり、またヨーク大学大学院に留学していた娘が大英図書館に出かけて *Dicks' Standard Plays* から5点をコピーしてもらったりして、1点を除いてほぼ脚本が揃った頃、アメリカのReadex社が英米の著名図書館の協力を得、30年をかけて編集した *19th Century British Drama* がマイクロフィッシュ版で出版された。これは早速購入した(文部科学省助成金および平生太郎基金科学研究奨励助成金)。だが、この1万点を越す戯曲集にも“The Lighthouse”のみは入っていない。これは手稿の形でしか存在せず、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum)、大英図書館 (The British Library)、ニューヨーク公立図書館 (The New York Public Library) の3ヶ所に保存されているのみである。VAのコリンズ直筆の原稿には一時挑んだが、途中から訂正

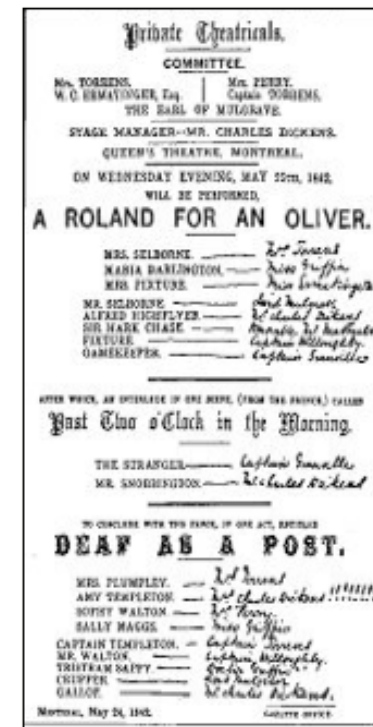
や加筆が随分多くなり、しかも有名な悪筆とあって、これを写しとるのは諦め、大英図書館のMSをマイクロフィルムで送ってもらってこれを書き写すことにした。こうして揃った戯曲集をリストアップすると、別表のようになる。

2 俳優および舞台監督として

ディケンズがはじめて素人芝居を演じたのは、ジョン・ハワード・ペイン作の『クラリ、またはミラノの乙女』(*Clari; or, the Maid of Milan*)であった。この作品は1823年5月8日にコヴェント・ガーデン劇場で初演されるや大ヒットとなり、おそらくこれを見たディケンズは深い感銘を覚えたにちがいない。1833年、彼はこれを家族と友人仲間で演じたのである。初回リハーサル(4月13日)から音楽・衣装をそろえた本稽古(4月19日)を経て27日に上演するまで、21歳のディケンズがすべてを取り仕切った。番組編成も本格興行にならって喜劇オペラ、幕間劇、笑劇の3本立てとし、ディケンズ自身、番組すべてに出演するとともに、舞台監督としても敏腕を振るった。

初回上演から数えてほぼ10年後、『ピクウィック・クラブ』、『オリヴァー・トウィスト』、『ニコラス・ニクルビー』、『骨董屋』の成功で文壇の寵児となったディケンズは、1842年の1月、アメリカに渡る船上で知り合ったマルグレーヴ伯爵に請われ、5月にモントリオール駐屯部隊の士官が組織する素人劇団を率いて、慈善公演の全指揮をとることになった。彼は1ヶ月前に、『しっぺ返し』(*A Roland for an Oliver*)、『全く聞こえず』(*Deaf as a Post*)、『午前2時過ぎ』(*Past Two O'Clock in the Morning*)を選んで3本立ての編成とし、脚本の取り寄せ、舞台装置、道具の調達およびリハーサルはすべて自分の手でやってのけた。

舞台監督として全指揮を執る一方で、ディケンズは自らも後の2本に出演し、招待客500～600人を前に、扮装、所作、発声においてはプロ顔負けの演技を



モントリオール公演プログラム

披露した。慈善興業は大成功を収めた。

モントリオールで自信を深めたディケンズは、イギリスにおいてこれと似た企画を立ててみたいと考え、1845年、友人のジョン・フォスター、マーク・レモン、ヘンリー・メイヒュー、ダグラス・ジェロルド、ジョン・リーチ、ギルバート・ア・ベケット等に呼びかけて素人劇団を結成した。結成の手はじめにベン・ジョンソン作の『十人十色』(Every Man in His Humour)とフレッチャー作の『兄』(The Elder Brother)を選んで準備を重ね、ソホーにある「ケリー嬢の劇場」を借りて、600～700人の招待客を前に上演した。ここでディケンズはボバディル大尉をみごとに演じ、プロ級といわれるマーク・レモンのブレインワーム役を凌いで、並み居る人々の心を捕えた。素人興行であるにもかかわらず『タイムズ』紙をはじめとして、紙上で絶賛を浴び、リー・ハントもまた、ボバディル役に深く感銘し、「この役をこれほど知的に理解した俳優はいなかった」(Fawcett 146)と褒めた。

しかし、演技の巧みさとは比較にならないほどすばらしかったのは、ディケンズが舞台監督、舞台背景係、大道具係、小道具係、進行係、楽団指揮をすべて兼ね、衣装・ポスターの考案、リハーサルの立案とその実行にいたるまで、公演の指揮・運営を一手に引き受けた実務の才であった。彼はこの事業全体の「生命であり魂であった」とフォスターは記している(Forster 5: 1)。

『ドンビー父子』執筆中の1847年、ディケンズは同じ脚本を用いて老齢に達したリー・ハントおよびジョン・プールの生活支援を行なうため、慈善興行を行なった。女性役にはプロの俳優を配し、入場料を1シリングに定めて7月26日にマンチェスター、7月28日にリヴァプールで『十人十色』を演じたところ、それぞれ£440.12、£463.8.6の収入をあげた。幕間劇と笑劇は、26日が『形勢逆転』(Turning the Tables)と『熟睡』(A Good Night's Sleep)、28日が『形勢逆転』と『快適な宿』(Comfortable Lodging)であった。

この慈善興行の一環としてロンドン公演のために準備していた『ウィンザーの陽気な女房たち』が、政府の芸術家に対する年金下賜によって上演の必要を免れると、シェイクスピア協会のメンバーであったディ



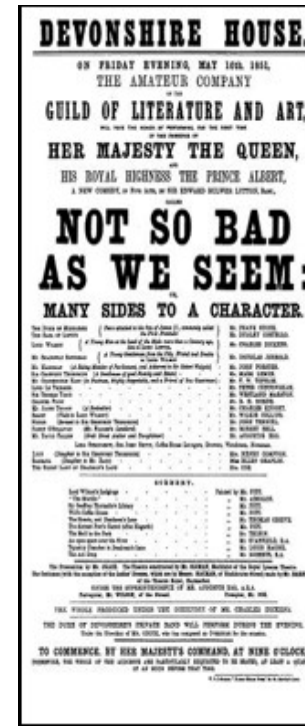
『ウィンザーの陽気な女房たち』

ケンズは、この脚本を用いてシェイクスピア生家博物館館長職の基金設立興行を思い立ち、今回はジョージ・クルークシャンクやG・H・ルイスをメンバーに加え、プロの女優カウデン・クラーク夫人は召使クイックリー夫人役としてこの劇団に加わった。1848年5月から7月にかけて、ハイマーケットで演じた2回(うち1回は女王夫妻が臨席)を含め、マンチェスター、リヴァプール、エディンバラ、バーミンガムおよびグラスゴーでの公演をあわせて計9回上演し、£2541.8の収入をあげた。

この巡業の間、ディケンズは一貫して舞台主任に徹し、リハーサルでは登場人物の対話や舞台入場の仕方、舞台上の仕草・位置を指示するとともに、公演に支障の出ないようにあらゆる気配りを行なった。のち、回想記の中でカウデン・クラーク夫人はディケンズのリハーサルにおける真剣さと指示の巧みに賛辞を送っている(Clarke 708-13)。

次いで1851年、世界初の万国博覧会がはじまって早々の5月16日、ディケンズは女王とアルバート公をはじめ、多くの貴顕を前に『見かけほど悪くない』(Not So Bad As We Seem)を演じた。この公演計画は、以前より行ってきた文人互助計画を、恒久的な制度にできないかと考えたディケンズが、「文学と芸術のギルド」設立を提唱し、文人仲間であるリットン卿に新作の戯曲を書いてもらって実行に移された。その趣旨は、作家や芸術家の労に報い、老後は生活苦に追われずゆつくり過ごせる制度と施設を作ろうというものである。ディケンズは、リットン卿が5幕物の喜劇を書き、自分は笑劇を書いて、これをロンドンおよび地方で公演し、ある程度の基金を手にした段階で計画の詳細を文書化して、各方面に働きかける計画であった。

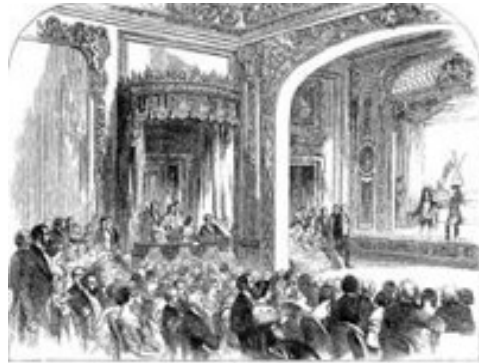
依頼を受けたリットン卿はすぐさま執筆に取りかかり、1月1日には原稿を送ってきた。ディケンズは一読して感動し、ただちに4月30日の本番にむけて作業を開始した。200名の観客を選び、入場料を設定し(5ポンド)、設立趣意書の起草をはじめ全企画の準備と運営を引き受けるとともに、自分も



『見かけほど悪くない』

笑劇の執筆に取りかかった。ところが折悪しく父と娘をなくする不幸に見舞われ、一時は公演の見通しが立たなくなったが、女王より2週間の公演延期許可を得、16日に上演にこぎつけた。初演には女王夫妻とウェリントン公爵も臨席され、女王からは150ポンドの慈善寄付金がよせられた。

笑劇の執筆はマーク・レモンとの合作に切り替え(5月1日



「デヴォンシャー公爵邸における上演」

に完成), ディケンズはそのなか
に洒落や、ギャンプ夫人並みの老女や威勢のいい靴磨きのおもしろさ, おかしさをふんだんに盛り込んだ。出来上がった『ナイチンゲール氏の日記』は、『見かけほど悪くない』と組み合わせ第2回目の公演(5月27日)で初披露され、1人6役を演じるディケンズの名演技は爆笑を巻きおこした。この日は芝居のあとに夕食会と舞踏会が計画され、ふたたび満席となって、企画は2日間で£2,500の基金を手にする。そしてこれを皮切りに、1年半にわたる地方巡業が始まるのであった。

計22回の公演のうち、最終回(リバプール)は『見かけほど悪くない』に代えて『退屈男』(Used Up)を用いた。それまでのさして面白みのないウィルモット役から解放されたディケンズは、いろんな人物に変装するサー・チャールズ・コールドストリーム役を演じることになり、まるで魚が水を得たかのように精彩を放つのであった。

巡業は大きな成功を記録した。しかし、華やかな成功の陰でディケンズの嘗めた苦労は並大抵のものではなかった。日々の舞台設営、舞台装置の点検、また急ごしらえの劇場の倒壊危機に晒され、恐怖と戦いながら細心の注意と努力を傾けるディケンズの姿があった。



「退屈男」

3 小説の新領域

1855年、コリンズが『灯台』の脚本を持ってきたとき、ディケンズは新しい長編小説の構想に苦しんでいた。だが脚本に目を通すなり、彼はすぐさま上演を決め、数日後にはロイヤル・アカデミー会員であるスタンフィールドに舞台背景画を依頼し、マーク・レモンをはじめ知人・友人に配役を割り振ると練習日程を組み、6月中旬には上演にこぎつけた。

「世界でもっとも小さい劇場」と銘うったタヴィストック劇場(ディケンズ邸の子供勉強部屋)における上演は、ディケンズが多くの新聞・雑誌の劇評家を招待していたこともあり、評判はすこぶる高く、多くの人々が是非見たいと希望した。とにかく観客席が25席しかないのではとても要請に応えきれず、そこでやむなく1ヶ月後にケンジントンにあるウォー大佐の邸宅(キャムデン・ハウス)で、結核患者療養施設の募金活動を目的として上演することを決定した。

この演劇のすべてはディケンズの演技の妙にある。暴風雨に遭って難破した船から乗組員を救出したまではよかったものの、灯台守(Dickens)はその中に自分がかつて殺害したはずの女性を認める。夢にうなされて過去の悪事を口走った父の言葉に不審を抱いた息子が父と言い争っているさ中に、その女性が、突然二人の前に立ちあらわれる。欺瞞の露呈とともに灯台守は失神して倒れる。その燈台守は、まるで死の世界からよみがえってくるかのように、ゆっくりゆっくり意識を回復する。その意識回復過程をディケンズは、まるで神業のように演じるのであった。観客席でこれを目にしたかつての俳優イエイツ夫人は、芝居が終るなり目を真っ赤にはらしてディケンズのもとに駆け寄り、「あ、ディケンズさん、あなたにはほかのことができるなんて、なんて残念なことでしょう」(バーデット=クーツ宛書簡, 1855年6月19日)と述べた。



「灯台」

“O Mr. Dickens what a pity it is you can do anything else!”

これだけの演技力をもちながら、なぜそれを職業とせずに作家などになったのかと驚くとともに、その妙技を称えたのであった。ディケンズの演技のすばらしさを要約する名言である。

彼の演技に対して、カウデン・クラーク夫人もまたこう記している。

すばらしい演技だった。実に想像豊かで、独創に満ち、狂乱した、印象的な演技だった。崇高なほどに知的な二つの目は、うつろにさまよい、悲しげで怯え、うろたえたまなざしは、まるで魂が身体から抜け落ち、がらんどうになった人のそれであった (Pemberton 128)。

この『灯台』上演は、ディケンズの単なる余技としてではなく、創作活動との補完関係において眺めてみたい。1855年の1月、かれは新しい小説『誰の責任でもない』(“Nobody’s Fault”)の構想を温めていた。ディケンズは週刊誌上でロンドンの衛生問題および労働者の良質な住宅政策について提言をしていたが、政府はこうした提言を頑迷に拒み、新年に入ってからクリミア戦争でおびたしい失策を繰り返していた。業を煮やしたディケンズは、「おびたしい愚策」という記事を誌上に連載し、パーマストン内閣を批判し、ひたすら行政改革を促そうと試みた。しかし政府はへつらいや世辞をうけ入れ、無能者を重要ポストに任命して改革に踏みだそうとはせず、それを見たディケンズは、官僚機構の腐敗をどのような形で作品に反映できるかを悩みつづけていたのである。

同年5月に『誰の責任でもない』の執筆にとりかかるが、重苦しい政治批判を前面に出せば出すほど筆は進まない。前回の月刊小説(『荒涼館』)では、開巻章に重厚な社会批評を掲げて成功したので、この度も急進的な社会批評を展開したいと考えた。それだけに作品の全体構想はまとまらず、開巻章で行き詰まっていたのである。折りしもコリンズから新しい脚本が届いた。出来はいいし、行詰り打開にはうってつけの気晴らしとばかり、上演に飛びつく。プロローグを一気に書き上げ、昔読んだ「グロヴナー号」難破の物語を歌詞に仕立て上げ、これを「リトル・ネル」(バラッド)の節まわしでフィービ役をやる娘のメアりに歌わせることにした。リハーサルと本番でこれを耳にしているうちに、この歌の余韻がディケンズに閃きを与え、構想を練っていた新小説の題名が『誰の責任でもない』から『リトル・ドリット』に変更される。作品全体を統括する象徴的存在が可憐なる少女ネルによって触発され、これまでの政治批

判から大きく転向し、人間および人間社会の欺瞞と救いを扱う作品に変更された。これが9月の半ば、そして12月には『リトル・ドリット』の題名で第1分冊が出版されるのである。

『灯台』上演は創作の苦しみから抜け出す一時的な衝動ではなく、ディケンズの小説をより高い次元に推し上げ、作品構成の重厚さに貢献していることに注目したい。そしてまた灯台守の意識回復過程は、欺瞞の権化ともいえるウィリアム・ドリットの、過去の亡霊との戦い、失神、絶命の過程とつながっていく。とりわけ、絶命したあと、リトル・ドリットの見守る中で彼の顔から偽りのヴェールが一枚また一枚と剥げ落ちてゆく場面には、ディケンズの深い人間心理の洞察が見てとれるのである。そして、これが演劇人であったディケンズの心理描写の方法でもある。

成功を重ねたディケンズの素人興行は、1857年、コリンズの三幕物『凍れる海』(*The Frozen Deep*)の上演をもって幕を閉じる。そしてこの作品の主人公が、彼に新たな小説の領域を開拓させるのである。

場面はニューファウンドランド沿岸の洞窟、背景には北極の海に座礁した軍艦が描かれている。脚本はディケンズが相当に手をいれ、カットして、恋人を奪ったオールダーズリ(Frank Aldersley)を殺害しようとするウォーダー(Richard Wardour)の性格が入念に練り上げられている。艦が氷に閉じ込められて3年、食糧も底をつき、あとは助けを求めるとする方法がなくなって、この二人が選ばれて氷雪原の中へと旅立つ。途中、ウォーダーは何度か眠っている間に相手を遺棄しようとするが、そのたびに良心が抵抗してその考えを押しとどめる。空腹と疲労に苛まれながらも、彼は眠る相棒を残し水と食料を求めつづける。その彼の前に、偶然にも、国に残してきた人々を乗せた救出艦が現われる。しかもそこには、捜しつづけてきたかつての恋人が乗り合わせていた。朦朧とした意識の中でひと目彼女を見た彼は、引き返すとぐったりしたオールダーズリを抱えてあらわれ、彼を彼女に預けると「あなたのために、彼を助けました。私の仕事はもう終わりました」と述べてそのまま安らかに息を引き取る。愛する女性のために命を捨てる気高さは、ディケンズが既成のモラルに縛られぬ新しいヒーロー像を探求する中で、生まれてきたと思われる。もちろんこれが次の小説『二都物語』(1859)のテーマになっていることはいうまでもない。

1月5日、本番リハーサルをかねて召使いや出入りの人々の前で演じると、6日には子供部屋と庭を改造して作った劇場に、90名を招待して上演した。死が刻々と迫る主人公の最期の様子は、観客を深い感動で包み、『リーダー』紙は「ディケンズの演技は新時代の幕を開く」と書いた(*Letters* 8: 254n)。またサッカーは、「彼なら年収2万ポンドを手にする俳優になろう」と述べている

(*Letters* 8: 261n). 再校の礼賛である。次いで8日, 12日, 14日に演じて公演はすべて終了, タヴィストック劇場はそれをもって解体された。

ところが6月8日にダグラス・ジェロルドが亡くなって事態は変わった。二日後の10日に弔問したディケンズは, すぐさま追悼事業委員会を発足させ, 追悼事業の一つとして『凍れる海』の上演を行なうことにした。7月4日にギャラリー・オブ・イラストレーションで女王および付添いの人々のために私的に上演したあと, 1週間後より4回, つまり7月11, 18, 25日, および8月8日に, ジェロルドの追悼興行として, 『凍れる海』を上演した。

ところが『凍れる海』を見ることのできなかったマンチェスターの人々から, 是非とも当地で公演をしてほしいとの要請が届いた。一時はためらったものの, 結局はこれを受け入れ, 8月21, 22, 24日, フリー・トレイド・ホールにおいて素人演劇活動の最後となる『凍れる海』を演じた。

要請を受けたとはいえ, ここは3,000人収容のホールなので, プロの俳優でなければ声が届かない。探しているうちに, 紹介されたのがターナン一家であった。ディケンズは短期日で演技を教えこみ, すばらしい成功を手にする。8月24日のチラシには, ターナン夫人とエレン, マライアの二人の娘が『凍れる海』および『ジョン伯父さん』(*Uncle John*)に出演している (Tomalin 101)。芝居のクライマックス, いままさに死なんとするディケンズの顔を両の手にとり膝にのせたマライアは, 彼が本当に死んでしまうと思って, その顔の上に涙の雨を降らす。するとディケンズは小声で「あと2分で終わるから, 気持ちを静めて」と下からささやいたが, 「もうすぐこと切れるなんていや, 私をこんな悲しい目にあわせたまま先立たないでください」と, 哀願するのであった (ワトソン夫人宛書簡, 1857年12月7日)。この心情吐露は, ディケンズをことのほか喜ばせた。これ以後, ディケンズは姉エレンとの関係を深め, 1858年, ついに22年間連れ添った夫人と離縁を決意する。

その離縁をめぐるこれまで一緒に巡業してきた友人仲間は二分し, もはや演劇活動はつづけることができなくなった。ディケンズの演劇活動は, これ以後, そのわけ口を公開朗読に求めるのである。

参考文献

- Brannan, Robert Louis, ed. *Under the Management of Mr. Charles Dickens: His Production of "The Frozen Deep."* Ithaca: Cornell UP, 1966.
- Clarke, Mary Cowden. "Charles Dickens and His Letters." *Gentleman's Magazine* (1872): 708–13.
- Dexter, Walter. "For One Night Only: Dickens's Appearances as an Amateur Actor." *Dickensian* 35 (1939): 231–42; 36 (1940): 20–30, 90–102, 130–35, 195–201.
- Fawcett, F. Dubrez. *Dickens the Dramatist on Stage, Screen and Radio*. London: Allen, 1952.
- Horne, R. H. "The Guild of Literature and Art at Chatsworth." *Gentleman's Magazine* (1871): 246–62.
- Langton, Robert. *Childhood and Youth of Charles Dickens*. Manchester: Albert Chambers, 1883.
- Morley, Henry. *The Journal of a London Playgoer*. 1866; Leicester UP, 1974.
- Pemberton, T. E. *Dickens and the Stage*. London: George Redway, 1888.
- Tomalin, Claire. *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*. NY: Knopf, 1991.
- Van Amerongen, J. B. *The Actor in Dickens*. 1926; Haskell, 1970.
- Yates, Edmund. *Edmund Yates: His Recollections and Experiences*. 2 vols. London: Richard Bentley, 1884.
- "Charles Dickens's Acting in 'The Lighthouse'." *Dickensian* 5 (1909): 91–94.
- "Mr. Dickens's Amateur Theatricals." *Macmillan's Magazine* 23 (1871): 206–15.
- "The Devonshire-House Theatricals." *Bentley's Miscellany* 29 (1851): 660–67.

参考資料

ディケンズの演じた素人演劇脚本一覧表

	劇作家	戯曲 / 所在	種類
1833	Payne/Bishop	<i>Clari, or, the Maid of Milan</i> 『クラリ, またはミラノの乙女』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XXIV)	Light Opera
1833	O'Callaghan	<i>The Married Bachelor</i> 『独身者の結婚』 (<i>Cumberland's Minor Theatre</i> , x)	Comedy
1833	R. B. Peake	<i>Amateurs and Actors</i> 『素人役者と俳優たち』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XVI)	Mus. Farce
1842	Morton	<i>A Roland for an Oliver</i> 『しっぺ返し』 (<i>Lacy's Acting Edition of Plays</i> , lxxv)	Comedy
1842	J. Poole	<i>Deaf as a Post</i> 『聞こえぬふりをして』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 343)	Farce
1842	Mrs. Gore	<i>Past Two O'clock in the Morning</i> 『午前二時すぎ』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 403)	Farce

(This last piece was afterwards billed as *Two O'Clock in the Morning*, then as *A Good Night's Rest* by Mrs Gore.)

1842	J. Townley	<i>High Life below Stairs</i> 『召使たちの豪華な生活』 (<i>The London Stage</i> , vol. 1)	Farce
1845	B. Jonson	<i>Every Man in his Humour</i> 『十人十色』 (London: Yale University Press, 1969)	Comedy
1845	Fletcher	<i>The Elder Brother</i> 『兄』 (<i>The Works of Beaumont and Fletcher</i> , 1969)	Comedy
1846	Peake	<i>Comfortable Lodgings, or Paris, in 1750</i> 『快適な宿』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XXIX)	Farce
1847	J. Poole	<i>Turning the Tables</i> 『形勢逆転』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 380)	Farce
1848	Shakespeare	<i>The Merry Wives of Windsor</i> 『ウィンザーの陽気な女房たち』	Comedy
1848	Kenney	<i>Love, Law and Physic</i> 『恋人, 弁護士, 医者』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No. 673)	Farce
1848	Mrs. Inchbald	<i>Animal Magnetism</i> 『催眠術』 (<i>London Stage</i> , vol. 4)	Farce
1848	Boucicault	<i>Used Up</i> 『退屈男』 (London: National Acting Drama Office, n.d.)	Comedy
1851	Bulwer Lytton	<i>Not So Bad As We Seem</i> 『思ったほど悪くない』 (London: Chapman and Hall, 1851)	Comedy
1851	Dickens	<i>Mr. Nightingale's Diary</i> 『ナイチンゲール氏の日記』 (<i>Complete Plays</i> , 1970)	Farce
1851	Mrs. Kemble	<i>A Day After the Wedding</i> 『結婚式翌日』 (<i>Cumberland's British Theatre</i> , XXIX)	Interlude
1854	Fielding	<i>Tom Thumb</i> 『親指トム』 (<i>British Drama</i> , vol. 2)	Burlesque
1855	Planché	<i>Fortunio and His Fairy Seven Gifted Servants</i> 『フォーチュニオと七人の供侍』 (<i>Extravaganzas</i> , vol. 2)	Extravaganza
1855	W. Collins	<i>The Lighthouse</i> 『灯台』 (MS, British Museum)	Melodrama
1857	W. Collins	<i>The Frozen Deep</i> 『凍れる海』 London: C. Whiting (private), 1866	Romantic Drama
1857	J. B. Buckstone	<i>Uncle John</i> 『ジョン伯父さん』 (<i>Dicks' Standard Plays</i> , No.826)	Farce

ディケンズの速記と人物造形

Characterization as a Result of the Use of Shorthand in Dickens's Writing

松本 靖彦

Yasuhiko MATSUMOTO

断片的記述とイメージとを結びつけるという点で、速記術とディケンズの想像力の働きには共通点がある。ディケンズと速記との関係を考えるのならば、音声言語を「写し取る」という速記本来の機能に着目するのが本筋だろうが、本稿においては、速記とディケンズの想像力との間のアナロジーに焦点をあてて、彼が断片をイメージやキャラクターに結びつけるプロセスを追ってみたい。

「ちょっとしたしるし」— 速記的人物描写

私の知る限り、速記をディケンズの芸術を表す比喩として初めて効果的に用いたのは、作家のツヴァイク (Stefan Zweig) である。

小説を書き始める前議会の速記者であったディケンズは、その何年かのあいだ、一点一描で一つの単語をあらわしたり、短いラセン模様で一つの文を表現する方法、複雑な内容を記号に押しこむ訓練を積んだわけであるが、後にはこれを文学に応用して、いわば現実の速記を練習することになった。ちょっとしたしるしをあげて叙述に肩替りさせ、千変万化の事実から観察のエキスを蒸留した。(ツヴァイク 76)

確かに、ディケンズはしばしば断片的な特徴でもって人物を表現する。例えば、『ドンビー父子』のカーカーは輝く歯で、『大いなる遺産』のジャガーズ弁護士は無敵の人差し指で、そして彼の右腕ウェミックはポストのように開閉する口で、それぞれ繰り返し描写されている。

ミラー (J. Hillis Miller) もツヴァイクと同様、「速記的」なディケンズに着目したことがある。彼は1970年のある論考で、ディケンズの描写にみられる、「断